桃洞遺筆 第二輯 巻上

内閣文庫
和
内閣文庫
番號 和 8227
冊數 6 (4)
函號 196 131

国立公文書館
National Archives of Japan

嘉永三年庚戌十一月刻成

蘭峡小原先生輯録

桃洞遺筆

二編 三冊

發行書房 眉壽堂 世壽堂

明治十二年購求

桃洞遺筆巻之四目録

天蠶絲
磁石毛
鱧魚
蛀蘭
榼藤子
一指石
小異魚
緬茄
荷包牡丹
蘭花豆
鱮魚
蜈蚣蘋
蕃拺
荻蘆竹
松蟲 附 鈴虫
鱅魚 附 鰶魚 江鰶魚

桃洞遺筆巻之四目録

攫山椒魚

丹生村大樟樹

内閣文庫

桃洞遺筆巻之四

紀伊　小原八三郎源良直　録

天蠶絲　附天蠶蟲

今漁人釣緡に用ふるテグスを。國によりグとも。グスともスヂともいふ。漢名天蠶絲。南寧府志 廣東新語 一名天蠶繝。廣東通志 楓絲。粤西偶記 楓蠶絲。本草綱目 蟲絲。圖書編 漳州府志 明一統志 といふ。舶來多し。其品一ならず。大抵ハチモトとヤマの二

名にて分ち、其中より絲の大小色の異なるを以て又品
名を分てり。チモトを絲圓し、中にてナンメと稱する
を上品とし、ヤマを絲織に扁く捩ひり、又サカテグス
といふハ、節の如きもの着り常のテグスを白根の處
本なり。サカテグスを白根の處末なり。この末より裂(サケ)
ハ等屑(ヨクズ)の如に成る。下品にして其値賤し。往昔ハ志の
テグスと何物とも志らず。或ハ海艸の茎とし、或ハ海
艸の根とし、誤の甚しきものなり。其後テグスを焼て
絹絲の臭氣あれと、明清の諸書に載る説と併せ考

へて、蟲絲なる事を志れとも、又何の蟲より生ずると
とを知らざりしに、本邦に産せざる處ものとし、青木敦
書が昆陽漫錄巻三に、南方熱國ノ物ナルベケレ氏、種ヲ
滑テ試タキモノ也」と云へり。漸享和壬戌の年、土佐の
宮地郁藏、維則常毛採藥錄を撰して、其附錄に始めて伯
耆の方言、スカシダワラなることをいふ。されど其製
法を不識して、只傳聞のまゝ記せし者なり。其文に曰、
先年薩州ノ人、琉球ニ在テ蟲絲(テグス)ヲ作ルヲ見テ圖シテ
歸ル。其繭伯州ノスカシダワラト全ク同シ。然レドモ

既ニ繭ヲナスモノハ絲トナラズ。其蠱ヲ養ヒ絲ヲ作ラントスル時ヲ候ヒ。蠱ヲ煮テ絲トス。是ハ琉人ノ極秘ニシテ薩人ニモシラシメサルヨシヲ聞ケリといへり。按するに。此蠱今諸州深山中に、あり。多くは栗と漆の二樹に産す。又稀に櫧(カシ)槲(ヤツ)樟(クス)崖椒(イヌサンシヤウ)ブナノ木ツ子ノ木等にも産す。俗にワリブリツクリ。下野南摩 シナン太郎。下野久野 シナノ太郎。信濃 山椒太夫。同上栗に生ずるに限りていふ又大和十津川奥にては崖椒に生ずるに限りていふ 白子(シロコ)太夫。阿波祖谷 白ケムシ 紀伊熊野及在田郡山保田 といふ。形蠶の如にして長く。四月頃蠱

の大さ二寸七八分許。色青く頭と足と紫黒色尻に同色の剣あり。又食ふ木葉によりて其色種々あり總身に皆長き白毛ありて毛蟲(イラムシ)の如し。而して手に捕ふときも人を螫さず。此虫を養ふに。栗にても漆にても多く植ゑて。四方へ溝を掘り。形小なるときは諸山にあるを捕へ来り。其樹に放つべし。溝あれば蠱外へ遁れ去る。最露天にもすべし。四五月の間此虫を生なるを刀にて堅に裂き。腹中に柔かなる二條の縮絲あり暫く醶醋中に浸し置き。採り出して接引きのべ。大なる者へ

大抵長さ五六尺にも至る。蟲の食ふ葉によりて絲に軟硬あり。色に種〻あり。又雄絲ハ圓く。雌絲ハ微に扁なり。所謂チモトとヤマの別あり。又砂も雄ハ圓く。雌ハ扁なり。又蟲老ぬれハ白根多く。若きれハ白根少なきものハ力弱し。宜く中を採るべし。此絲を採るに大に時と爭ふ者なり。此蟲を其中に養ひ置けバ。後に口中より絲を吐きて繭(マユ)を作る。長さ二寸許。濶さ五六分。兩頭尖り褐色にして。光澤ある絲縱横に交糾して。羅網の如く。至りて堅し。此品も亦數色あり。因幡伯耆邊にてあり。

天蠶

景翫

スカシダハラといふ。又ホトヽギスノクツ。ムセンテウノクツ。アミブクロ。（大和十津川）ヘチマ。（越中）神ノガラく。（信濃美濃）山姥ノ袋（出羽）等の名あり。此外方言多かるべし。信濃にて。此繭を正中より横に切て。指の先に入れ。水田中の艸を採るに用ふ。此繭にてテグスを製造せる者と誤り思ふ人多し。其製法及蟲を養ふ法。猶詳なる事ハ別に録せるをもて茲に贅せず。此蟲の漢名天蠶（廣東新語）絲蟲（潜確居類書）楓蠶（事物紺珠　留青日札）樟蟲（漳州府志　物理小識）

直接とるに。天蠶と絲蟲ハ總名なり。楓葉を食ふを楓蠶といひ。樟葉を食ふを樟蟲といふなるべし。南寧府志（巻三）に云。天蠶絲。楓始生蟲。多食葉。似蠶而赤黒。四月熟。如蠶将絲。土人取之。其絲光明如琴絃。海濱蛋人鬻之作釣繊。潜確居類書（巻百十七）に云。絲蟲生南寧州。食楓葉。能作絲。光明如琴絃。漳州府志（巻三十八）に云。樟蟲。如指大。長数寸。緑色。以醋洗之。去肉。其中有絲。抽出丈許。名曰蟲絲。物理小識（巻十）に云。樟蟲。入醋死。引腹中筋。長丈餘。閩人用緑蒲葵。楓蠶之絲。亦韌。可作

木釣繙。凡樹蟲如蠶者、皆有絲成繭成蛾。熏紙甲皆厚、

廣東新語 巻二十四 に云。天蠶ハ出陽江。其食ハ必樟楓葉。歲

三月熟。醋浸之抽絲。長七八尺、色如金、堅韌異常。以作

蒲葵扇緣。名天蠶絲。亦有成繭者。大於家蠶數倍。禹貢

厥篚檿絲。或ハ即此類。然モ不可繅為絲。入貢者、齊魯之山

繭也。有沙柳蟲。腹中絲、亦可作緣。沙柳蟲も亦天蠶

の属なり。東安縣志 巻四 にも天蠶を載さる外に、沙柳

腹中ノ絲可縫葵扇と見えたり。

荷包牡丹

今人家及花戸にも多くうゑる。花鬘草ハ、一名花鬘牡丹

フヂ牡丹 クサ牡丹 信濃 瓔珞牡丹 仙臺 巾着

牡丹といふ。秘傳花鏡 巻五 に載さる荷包牡丹なり。一名

魚兒牡丹。以其葉類牡丹、花似荷包、亦以二月開、是得

名。一幹十餘朶、纍々相比。枝不能勝、壓而下垂若俛首然。

以次而開、色最嬌艶。根可分栽。若肥多則花更茂。必以へ而鮮黄梅雨時。亦可扦活。

るにて形狀明なり。魚兒牡丹の名を宋の時より呼べ

るにや。格致鏡原 巻七十一 に、宋の周必大が魚兒牡丹の詩

の序を引て云、渴之湘中、花紅而蕋白、狀類雙魚、纍々相

此ノ技不ㇾ勝ㇾ壓而下垂ス。直按、廣群芳譜巻三十三所ㇾ引、此下有ㇾ若ㇾ俯ㇾ首ヲ然ルニ、鼻目良ヤ可キㇾ辨ス九字葉與牡丹無ㇾ異、亦以ニ二月ヲ開ク。直按、同書此下、有下因テ是ニ得ㇾ名。其幹則芍薬也。余命シテ花嬪ト而賦ス是詩ヲ。開ク汴東中谷間タ甚多シ三十七字上。○又同書に、周必大が七言律詩、及ビ趙中甫、李子擢、楊廷秀の三人、周氏が韻を次て作る詩等を載セり。これは略にする花卉百種に、穿線牡丹ともいへり。

本藩山中信古云、此草なる朝鮮牡丹の名ありて、清の高士奇が苑西集巻五に、朝鮮牡丹を題せる詩三首を載せて、第一詩の、瓠子含ニ新蕚ヲ、荷嚢綴ル細枝ニの句註に、俗呼テ為ニ荷包牡丹トといひ、第三詩の、弱蒂看テ成ㇾ串、鮮葩巧合ㇾ雙の句註に、越中ニ名ク線穿牡丹トとみえたり。直按、もろこしにて六研齋二筆巻三にも此名ありて、花卉百種と、線穿の字相反せり。直云、又清の朱彝尊が日下舊聞巻三十八補遺男昆田輯に、六街花事を引て、荷包牡丹は草本、一名朝鮮牡丹、花似テ僧鞵菊ニ而深紫色、其以テスルニ牡丹ヲ者、因ル其ノ葉相類スルニ也、京師槐樹斜街慈仁寺薬王廟花市恒ニ有ㇾ之といへり。或説に此草は本邦へは延寶年中唐山より始めて來るといへども、關白兼良公の尺素往來に、華鬘花と出せるをおもへば、延寶より二百年餘以前にも、猶ありし草なり。本草綱目啓蒙巻二十二に、木曽山

中ニ自生アリ」といへり。

磁石毛

證類大観本草（巻四）に、蘇頌カ本草圖經ニ曰、磁石、其石上（本綱巻十石上作石中、本草原始巻十一石上作石黒色）有孔、孔中黄赤色、其上有細毛、性温、功用更勝と。本草啓蒙（巻六）に、磁石毛ハ、自然ニ沙鐵ノ附タルモノハ久シクシテ褐色ノ毛ノ如キヲ云フといへるハ非なり。按ずるに、磁石面上微し凹ふして周邊に疣瘤ある處ハ鐵色深く、能鐵を吸ふものなり。此處に鐵推をもて數十遍輕く打てば、自然に紫褐色の細毛を生ず。これ磁石毛なり。

蘭花豆

清俗紀聞（禮帙）に、七月七日家々菊葉、菱子、茄子、蘭花豆、麥の煉粉を附、油にて揚食を、是を巧菓と云。注に蘭花豆ハ、蠶豆を水に浸し、皮を去り、四ツに割目を入、油にて揚ものにて、蘭花の形になるなり」といへり。按ずるに、明の王仲遵が花史左編（巻二十三）に、蘭花豆嘉禾風俗、取蠶豆、毎粒破為四葉、菜油沸之、加以香料、焙燥、状如蘭花、味為上品とある是なり。今本邦にてもこれを製し售るも

の多し。

鱧魚

一名蠡魚。神農本經 本草和名第十六巻に。蠡魚。和名波牟。和
名鈔巻十九に。鱧。和名波無と訓せるより。今に至り其誤
り來ること久し。

直云。又醫心方。巻一巻三 康頼本草。蟲魚部 伊呂波字類抄。巻一
等みな。皆誤りて波无と訓せり。又新撰字鏡魚部に。鯛
を太比と訓せるの外に。鱧を載せて。すなはち太比と訓
し。鯇の字を波无と訓せり。甚をろそかなりし。又和漢三才
圖會巻五十に。鱧をハツ目ウナキみ充て。大和本草巻十三に
は。筑紫の方言。海ウナギに充り。皆真の鱧魚を知ら
ざる故み誤るなり。

鱧魚は。和産詳ならず。船來風乾の者。塩藏の者。稀にあ
り。本草啓蒙巻四十に。其形状を載るは茲に略す。直云。物類品隲
巻五に。風乾鱧魚の圖あり。又享和三癸亥の歳。清商孟涵九。活鱧魚
數尾を齎し来し。翌文化元甲子の歳。東都に致る。風乾
して枯瘦なる者と。形色大に異なり。先年其圖を得て
摸寫し。栗本氏の説と併せ出すこと左の如し。

[illegible]
一 [illegible]
一 [illegible]
一 [illegible]
一 [illegible]
[illegible]

鱧魚真圖

鱧魚真圖

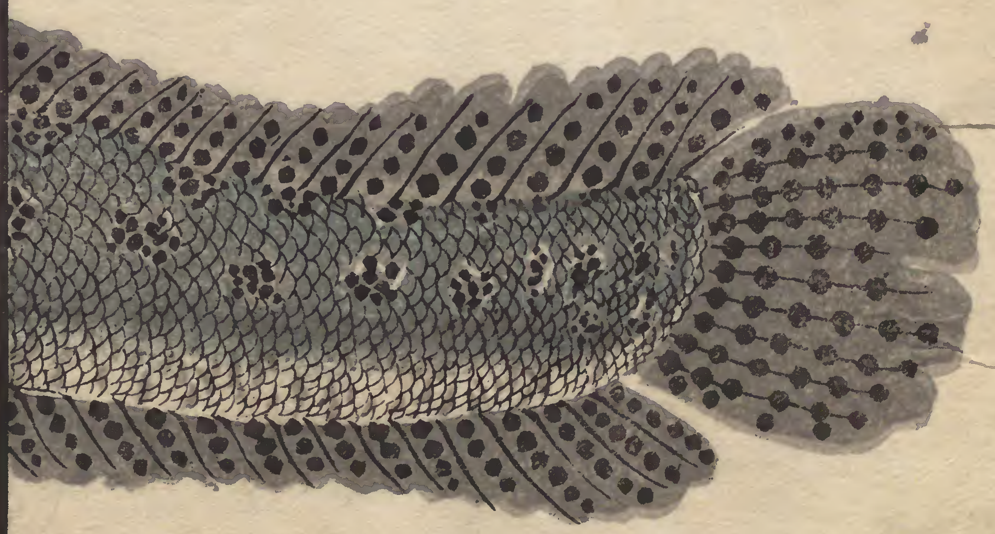
問七星魚有無產于各州縣
或止產于何處地界等因俱已
知悉據函取聞產地養法俱
覆于左

計開

一產于浙江、蘇合界
太湖之内

一此魚項大者約有四
五斤

一此魚可消下一切毒症
如小兒痘痧等症項



煎湯洒浴出花最輕
後食之能復元陽壯
力平常日間不能易
服

一此魚蓼養須放大魚
池内其喂養必得腐
渣無皮饅頭河泥

一此魚忌服甜酸鹹苦
并一切油物而木菓
中椒攬更甚

亥十二月

王局番外船主孟涵九記

王丹香竹館主玉西九記

文政十一年□月

[illegible]

往歳有　命淸國商孟涵九者使獻其北地所産之黒
鱧乃崎嶴鎮臺肥田豐後守忠英　上進文化甲子六
月五日也始儎來十餘頭今存活者七頭時余與尚藥
常春院中川老先生侍
御前拜賜觀因得審其形状實是昇平之餘澤千載之
奇遇也形長體圓細鱗青黒有斑點花文背腹有鬐鬣連
尾無岐頭尾相等其斑文頗類蝮蛇状甚可憎全身
有涎粘滑難握此鯠魚泥鰍之屬止以花文可觀又有
鱗為異耳余按與本草時珍所説相符合可謂能盡其

状矣此物本邦無産故先輩以相似之魚強誤充之皆
非也今也舶來致存活者于東都得始親観之多年
疑惑一旦豁然發明于此余欣抃之餘遂手自寫眞秘
奇之頃中川老先生請再摹之并孟涵九所業産地養
法一頁録之余不敢辞官暇揮拙毫而應其需且添記
其異名一二以贈焉

鱧魚 正字通 音里　一名黒鱧 通雅 食物本草 呉氏　七星魚 本草備要 本草從新 徐爾貞醫匯

文化甲戌三月十三日栗本瑞見法眼源昌臧識

⿰魚巽魚

明の翁仲仁が痘疹金鏡録(巻下)に云。鮮鱗攻毒湯。治痘出不快併一切陥伏倒靨。⿰魚巽魚頭(活者不論大小一個)。丹雄雞頭(去毛一個)。鮮筍尖頭一兩。加生薑五片。淡水同煮熟。取出令児飲汁。時加酒漿少許。児食雞冠并筍。餘不用。按ずるに。⿰魚巽の字。諸の字書に見えず。恐らくは前條の鱧魚なるべし。一説に。鯶の誤なるべし。字畫相似たりといふ。鯶は。諸聲品字箋(丁集息譜)に。似鯶而眼獨赤。亦作鮅といへば。鱒の事なり。是非を知らず。

直按ずるに。明の朱濟川が痘疹傳心録(巻十五)に。攻毒湯。治痘不易起發。⿰魚冀魚(活者不論大小一箇)。丹雄雞頭(去毛一箇)。穿山甲(三錢)。生姜(五片)。鮮筍尖頭(一兩)。右水煮熟。令児飲汁。時加酒漿少許。児食雞冠筍とあり。⿰魚巽を⿰魚冀に作れり。是亦字書に見えず。又清の曾香田が痘疹會通(巻四)に。鮮鱗攻毒湯を載せて⿰魚巽を鱔に作れり。又張氏醫通(巻十五)にも。亦大鱔魚頭に作り。注に如無鱔魚頭。魧⿰魚斷魚代之といへり。鱔魚は。即鱓魚にして。俗にウツボと称する物なり。鱔魚頭に此功ある事。諸本草に見

當らん。幼々新書。巻十八仁斎直指小児方論巻五等に。痘瘡の眼に入るを。生鱔血を点ずれバ、良なる事ハ見えたり。魷鰤魚ハ。何魚なるや未考へん。鯶鱴の二字博識の君子これを辨ぜよ。

毬蘭

櫻蘭ハ。今花姑に多く栽う。暖地の産なり。其苗藤蔓を引て。樹竹に上ること數尺。茎巨く鬚を生し。夏秋の間挿て能く活ん。葉の形揞(ヒツチリ)にして鋸歯なく。至りて厚し。金邉(フクリン)斑葉(フイリ)の種々なり。茎に對生ん。夏月葉間に。一寸許の茎を抽き花なり。数十花一處に聚り毬となし。皆下に向ひて開く。形俯せる粉團(テマリ)花の如し。一花の大さ三四分五瓣(イツヒラ)にして。瓣邉翻巻し。白色光澤(ツヤ)なり。外に赭黄小蕚ありて之を兼く。内には心高く起り。重臺をなし。又五出(イツヒラ)にして最小さく。粉紅色にして光澤なり。中心に一小尖なり。都て蕊鬚なし。花謝て蔕残り。來年其舊蔕よりも花を生ずる事。他草に異なり。蘭山翁の説に。廣東新語巻二十七に。有毬蘭。開至五十餘朶。團圓如毬。とあるもの是なりと云へり。按ずるに。續脩臺灣府志巻十八に。

番繡毬ハ。蔓生葉厚ク可シ銭花白色。底瓣似通草ニ為之。心微紅ニシテ而堅明亮如シ磬といへるなり。同物ならむ。

直云。按ニ櫟齋阿部氏の草木育種後編（巻下）ニ。攖蔔と。毬蘭。なる月記（灌園草木識）ニ充テ。亡羊山本氏の百品考（前編巻上）ニある、番繡毬。月記等ニ充り。二書考ふべし。按ずるニ。閩書（巻百五十）南産志（巻上）ニ。袞繡毬。藤生。花一簇數十葉。其圓如シ毬ノ。初開ニ微帯ヒ粉紅色ヲ。開盡則白シと載せたり。亦攖蘭ならむ。

蜈蚣蘋（ムカデモ）

蜈蚣藻を夏月水田中ニ生ス。一葉の形。螺靨草（マメヅタ）の葉ニ似て狹く薄し。三四寸の莖ヘ。數葉排生して。恰も蜈蚣の如し。故ニ名けたり。又山椒の一枝葉ニ似るをもて。山椒藻ともいふ。秋ニ至りて紅紫色を帯る。宋の陸佃が埤雅（巻十五）蘋の條ニ。似テ槐葉ニ而連生。生ス道旁淺水中ニ。與萍雜リ至テ秋ニ則紫といふ。即是なり。江邨氏の詩經名物辨解（巻一）ニ。陸佃が文を引て。即蜈蚣蘋ノ形状ニシテ。蘋ノ別種ナリ。といへり。蘭山翁の説ニ。蜈蚣蘋ハ和名なり。埤雅の文ニ據りて。槐葉蘋の名を命ずべしといへり。

直按するに。明の陸鳳儀が金華府志。(巻六)物産門草部
に。蜈蚣蘋の名ありて。形状を載せず。恐らくは同物ならむ
○又按ずるに。埤雅の至秋則紫の下。今俗謂之馬藻(藻本作藻)
亦呼紫藻の十字あり。此文と。本綱(巻十九)陳蔵器が説
に。馬藻生水中。如馬歯相連。といへるに據れば。馬
藻ハ。即蜈蚣蘋にして。柳藻にあらず。時珍が説に。馬
藻。葉長二三寸両々對生。といへるも。一葉の寸にあ
らず。両々相對せし長さの寸なるべし。既に清の徐
雪樵が毛詩名物圖説(巻五)にも。馬藻葉生於茎一二寸

両々對生すと見えたり。然れども。予是を深く考へざ
ればあらず。佗日諸書を探索して。後巻に辨ずべし。

榼藤

榼藤ハ。南方熱國の産にして。本邦に産せず。晋の嵇
含が南方草木状(巻中)に。榼藤依樹蔓生。如通草藤也。其子
紫黒色。一名象豆。三年方熟。其殻貯薬。歴年不壊。生南海。
解諸薬毒といへり。此子ハ。諸州四邊の海濱へ漂流し
來る。俗に藻玉といひ。誤認て藻實とする物なり。形に
圓扁あり。質に數色あり。本草啓蒙(巻十四上)に詳に載す。又

華佗中藏經（巻八）に。腸風下血ぞ。榼藤子皂莢子の二味を
用ひ。其餘。喉痺腫痛。五痔脱肛等に榼藤子を用ふる事。
本草綱目（巻十八上）に載きれバ。茲に贅せず。
直云。聖濟總録に。榼藤子を用ふる方多し 皆本綱に
載せず。今一二を左に抄出す。

○榼藤子丸 治腸痔下部腫痛。便血後重。坐臥不安。
榼藤子（半両） 威靈仙 大黄（各二両） 右三味。擣羅為末。煉
蜜和丸。如梧桐子大。毎服三十丸。温米飲下。空心食
前服（出巻之一百四十二）

○榼藤散 治痔瘻久不愈。 榼藤子（不以多少） 右一味
為散。先以蜜調少許。塗痔瘻瘡上。次用温酒調下一
銭七。食前服。（出巻之一百四十三）

文化二乙丑年二月。熊野浦大風雨なり。尾鷲浦邊へ。榼
藤子新鮮のものを多く漂着す。中には莢を存する物あ
り。其莢長さ二尺餘幅三寸許。形圖の如く。青褐色なり。
藏器か説に。廣州記を引て。角如弓袋といふ是なり。其
子を下種さするに能生す。其藤深緑色にして線棱なり
て繇凡藤の如く堅し。葉ハ木通葉に似て厚く。左右各

象豆莢
蓉暁寫

榼藤苗
春信寫

二つ。四葉一蔕にして。末に二鬚ありて物に纏ふこと圖の如し。然ども。本州にては二三年にして蔓の長さ三四尺に至り多くは枯る。之れ熱國の産なればなり。直云本草啓蒙巻十四上に。年久クナレバ。左右各四ニメ八葉一蔕トナル。其一葉ヲ離セバ。形長ク尖リテ南天燭葉ノ如シ。光澤アリ。蔓ト共ニ深緑色」といふ。今山中信古の園中に育ける所。蔓の長さ丈許に及べども。いまだ花實を着けず。悉く四葉一蔕なり。按ずるに。羅望子(ワニグチモクチ)苗は。皆初年より八葉一蔕にして。其一葉を離せば南天燭葉の如し。されど蔓と葉の茎とを紫褐色なり。草木育種後編巻下に。羅望子は。葉に廣葉細葉紫茎青茎に毛茸のあるあり無あり」といへば。種類多くありと見ゆ。啓蒙の説。恐らくは羅望子苗の形状を混じ謬しものならん。○直又云。草木育種後編に。象豆(モダマ)羅望子(ワニグチモダマ)彎珠等は。其實礪石(トイシ)にてすり。二ケ處許疵を付て。水に二日許浸し置き。横に盆中へ植(ウ)ゆべしといへり。實に然り。其侭にて栽れば新鮮の實にても生ぜざるもの多し。如此すれば悉く生ず。予も

毎に試むる處なり。羅望子彎珠等を次編に辨ず。

番柿

俗稱唐ガキ。又珊瑚珠ナスビともいふ。苗の高さ四五尺、莖柔弱なり。葉は艾葉に似て大に。楝(センダン)の葉に似て毛あり。折ときは惡臭あり。夏月葉間に。五瓣淡黄花を開く。花謝して實を結ぶ。形酸漿(ホヽヅキ)の殼苞を去るが如く。酸漿より大なり。熟して赤し。食用にあらねど。搗(ツキ)爛(タヾラ)かして。胡麻油に浸し置て。金瘡に傳けて佳なりといふ。大和本草巻九に稲若水の說を引きて。天茄子に充つるは誤れり。群芳譜亨部巻五に。番柿一名六月柿。莖似蒿高四五尺。葉似艾花似榴。一枝結五實或三四實。一樹二三十實。縛作架最堪観。火傘火珠未足為喩。草本也。來自西番故名といふ是なり。

直云。明の朱國禎が湧幢小品巻二十七にも。六月柿一名番柿を載たり。羣芳譜の文と大同少異なり

一 指石

本州熊野四箇(シカ)の莊。神内村の山中溪澗に。五尺許の圓石なり。土人指動石とよぶ。双手にて押動かせば。少し

も動くことなく、指頭をもて撼せハ忽動く。頗奇なり。
あるき偶石の両尖相遇て如此なるものか。地震なとにも
一転せす。揺動もすることもなかるへし。石亭が雲根志後
編（巻二）に近江国金勝寺門通りに六七尺斗一指石ある
事を載せたり。東海道名所図会（巻二）に震巌といふ。又笠
置山（山城）日光山（下野）榛名山（上野）巌島（安芸）千光寺山（淡路）等にも
産ス。此余諸州を捜索せハ猶多かるへし。潜確居類書
（巻二十七）に一指石。在荊州桐盧。長丈、高五尺。綴巌谷間。以
手抵之（直按。山堂肆考宮集巻ノ十九ニ以手作以一指）輒揺動。人力多則不能移。

元楊維禎有一指力可動、万夫莫能移之句といへり。（直按）
をさるに、明一統志、厳州府志、桐盧県志等に拠しへ、荊州
と厳州の誤なり。又荊州府志全部四十巻の中にも、桐
盧県なし。これも
證となすへし。

直云。此石をさして風動石とも、揺動石とも名づく。物
理小識（巻七）に、鷺島有風動石。石甚大而遇風動揺。以一
指撥之亦揺。而千指之力反屈焉といひ。清の呉陳琰
が曠園雑志（巻下）に、薊州九華頂有千仏寺。々後半里、一
石米粉色。縦二丈、広丈有五尺。曰揺動石。一人悄然推
之、輒颭々動。衆推則不動。試作語曰。我其揺則不動。初

動看道光板説鈴日影移處知之次看石知動也然石根山連無纖塵焉といひ清の蔣溥等が欽定盤山志巻三に揺動石在千柏寺北林木茂密中大若廈屋體圓正承以方石微撼之輙動といへり

荻蘆竹

俗称ヨシダケ一名ダンチク筑前○淡竹と紀伊和漢同名なり又アセといふ暖地の海邊に多し形状蘆或は荻に似て大なり高さ丈許葉も蜀黍に似て濶く長し莖の巨さ大なるは周圍三寸餘處々に節ありて竹の如し農家にこれを栽て藩籬とし春秋に枝を切て挿せば能活す筍の味苦し水に浸し苦味を去りて食す大和本草巻九に瘍醫筍ヲ取テ日ニ曝シ楊梅瘡ノ薬ニ加ヘ用レハ能毒氣ヲ泄下ス為妙薬味苦寒ナル故ナリ直云此根を曝して痛風の薬に加へ用ふ奇効あり本州の俗方なり此生竹ヲ割リテ炭火ノ上ニワタシ其上ニ炙物ヲ置テアブル火盛ナレ𪜈竹ヤケズ鐵橋ニ換用ユといふ宋の僧賛寧が筍譜巻上に秋蘆竹筍其竹似蘆身如荻蘆冬天不凋挿枝如生筍可食也といふ是なり按するに秋は荻の誤りなり本草彙言巻十一に荻蘆竹に作るを是とすべし

直云清の莊大中が東安縣志巻四に蘆荻竹あり形状をいはざれど本條と同物なるべし又臺灣府志巻十八に蘆竹似レ黍生二水涯濕處一といへるも亦同物ならん蘆竹は同名あり首譜荻蘆竹の外にあるに蘆竹とあるは毎々呼ぶ処のアシなり又本草彙言巻十一に蘆竹似レ蘆出二揚州東垂一肌理白淨可二以テ為一レ籬といへるは邦産はまだ考へず

小異魚

享和二年壬戌の春蘭山小野先生 台命を蒙りて本州熊野に採薬しけるに従ふ日高郡三尾の莊小浦にて小異魚を得たり土人其名をしらず形状圖の如く大さ五寸許頭を左にす

頭魚の如く窿起し目は大にして身薄く尾に至りて漸々細くなり其尾は巨絲のごとくし只一條にして赤色長さ三寸許全身淡紫色に小黒點あり又頭より尾に至りて腹の正中通りに一黒條あり腹微に白し脊鰭長くして柔の赤色燃るが如し又胸の下に巨毛一條ありこれも赤色にして長さ四寸許總體麗しき魚なり此浦にて時々鈎にかかることありといふ佗州

にも産して方言なるべし。

松蟲　附鈴蟲

松虫は新撰萬葉集（巻上）に待蟲と書るは假字なり。形西瓜の種子の如く、正黒色にして首小さく、尻大に、脊窄く、腹は黄白色なり。鳴声リンリンといふが如し。蟋蟀と同く、雄は尻二尾にして能鳴く。雌は二尾の中間に針あり。て鳴くことは能はず。原野草莽中に在りて、これを捕ふるに、晝は尋ねて獲がたし。夜燈を照らせば、則火光を慕ひ來りて獲易しといふ。松虫は草根に居る。鈴虫は梢葉に居れり。秘傳花鏡（巻六）に、金鐘兒似促織身黒而長鋭前豐後其尾皆岐以躍為飛以翼鼓鳴其聲則磴々如小鐘然此虫暗則鳴暁即止といふ。是松虫なり。直云金鐘兒は、もと明の劉侗于奕正等が帝京景物略（巻三）に出づ。花鏡の説は景物略によりて記せしものなり。又明の袁宏道が促織志（論似條）に、一種亦微類促織而韻致悠揚加金玉中出温和亮徹聽之令人氣平京師人謂之金鐘兒見暗則鳴遇明則止とも見えたり。

○鈴蟲は形促織に似て長小にして、黄褐色、腹は淡黄

色なり。長き鬚あり。鳴声チロリンコロリンといふが
如し。本州の俗チンチロリといふ。用薬須知後編(巻四)に紡績
秘傳花鏡(巻六)の紡績娘、一名聒々児に充つ。誤なり。娘々
(次編に詳なれば)蘭山翁も同書の金琵琶なりといへり。
直云山中信古が説は花鏡を考ふるに金琵琶は鈴
虫にはあらず。蟋蟀の下に出て形状を見せば全く蟋
蟀中の異品なるべし。鈴虫は清の王漁洋がいふ處の山
子に充つべし。其文は精華録(巻五)に、中中有虫声如撃
磬甚清越。蜀人謂之山子。又有花名龍爪甚艶。偶成絶

句稲熟田家雨。又風枝々龍爪出林紅。数声清磬不知
處。山子晩啼黄葉中。又香祖筆記(巻九)に、蜀道有花名
龍爪花色殷紅秋日開林薄間甚艶。又有虫其声清越
如撃磬然などゝ見えたり。これも亦形状をいはざれ
ども金琵琶に充つるよりも稲熟の頃に鳴く声如
撃磬といふ文によりて山子に充つるも可なるべ
きなりといへり。今暫く此説に従ふ。○直又云松虫鈴
虫の二品後世に至り其説互に混淆して一定ならば
金鐘児を松虫とし山子を鈴虫とするは松岡玄

達の説なり。また秦曲(ウタヒ)の野宮(ノヽミヤ)に、松虫なる声りんりんと
してといへるは据る所あるべし。蘭山翁も此説を是
とせり。又和漢三才圖會巻五十三大和本草巻十四本草正偽巻
八誹諧蓑纑輪巻三等に、金鐘児を鈴虫とし、山子を松
虫とせられたり。夫木和歌鈔第十四に、藤原為顕の歌、百
首歌虫五十首の中に「琴の音にかよふる峯の秋風
をたが松虫のしらべそふらん。又慈鎮和尚の歌、住
吉社百首御歌に「きみよしなばこのきりのもとの虫の
音にもそのこゝろにきく松風をあまと載せて其下に

亭子院御門ハ宇多帝と称し奉るなり。

延喜七年　亭子院御門御時。西河行幸せさせ
給ひけるに、忠岑新和歌序に云、みるめなくらし虫の
をもとめ夜るなきもすこのうそらなることをきく
へきめ、あるとりにも、山の端に月まちむしうかし
ひてきくむの聲はあやまさ哉。ある時はれ野遠の鈴
むしをきゝて、谷なる水の音にかよふのみまで云云と、かゝる
を据まるなるべし。各其證なれはかるべし。予二虫の
古書に載るものを悉く集めて別に録す。繁冗なれ
ば茲に贅せず。

緬茄

羣芳譜 蔬譜二 茄附録 に、明の許伯衡が滇南雜記を引きて云、緬茄出緬甸大而色紫蒂圓整蠟色者佳今會城絶不可得多以小者於蒂上刻人物鳥獸之形殊殺風景過滇中者多市之而滇中人亦以此贈遠 廣群芳譜 巻十七 に、宋の劉子翬が詩を載せて云、緬甸實如瓜垂金綴秋色誰刻紫瓊瑤玲瓏投遠客 珍異藥品に云、緬茄児用以抹眼眶去火毒又能解百毒形如大栗上有罩帽如畫皮様水磨塗治牙疼效 此品古渡の物藥肆にありてこれにて瞰眶を磨きて眼を明にすといへり、故に俗に眼茄と名づく、形牛奶茄の如く、大さ七八分、圓長方一ならず、皮は栗に似て厚く堅くして石の如し、一方に蒂ありて五瓣になりて、圓整にして覆をなしたるがごとし、振ればがらがらと鳴る、割りて中に黄肉と種子あり、好事の人、壓口捺子といへり、草木の別ちあるべからず、

直云、天野信景が鹽尻 巻二十一 に、緬茄は眼茄の事なる、王氏彙苑群芳譜滇南雜記などにありて、予もこの種を蒔しに、二三本生せしが、半夏の生えたるがごとくなり

しか。秋の末みな枯るべし。されば南方の温地な
らでは長ぜざるにや」といへり。天野氏は享保中の
人なれば、此頃は新鮮の物多く渡りしと見えたり。

鱅魚 附鰶魚

鱅魚は本草綱目 巻四十四 に出て、邦産詳ならず。多識編 巻四 に鱅魚を
このしろと訓ずるは誤なり。舜水朱氏談綺 巻下 に「鱅魚ヲ
コノシロト云フ非也。頭大ニシテ尾ノ方細ク、年ヲ経ル
ニ随テ頭愈大ニナル。故ニ一名胖頭ト云 直云、南寧府志巻三に鱅
鯆の外に鱮魚を載せて、一名胖頭とい
ふ。同名異物なり。鱮魚も亦邦産詳ならず。一二尺ヨリ三

尺ホドニナル也」と見えたり。このしろは世人常によく
識る魚なれば、茲に形状をいはざれども、明の王思義が三才
圖會 鱗介類五 第十三函 に「鰶ハ如鰣而小。鱗青色。俗ニ呼青鯽。又名青
鱗」といひ、閩書南産志 巻下 に「鰶魚如鰣而小鱗。名青鯽。又
名青鱗、以其鱗脊俱青也。冬月味腴」といふ是なり。○一
種コハダと呼ぶもこれなり。古名都奈之 萬葉集に本州よとも。今此名を呼
ぶ。形鰶魚に似て細く、五六寸より大なるは見ず。鱗
小にして厚く、黒點なし。腹下の芒刺、鰶魚よりも多くし
て、至りて堅し。味は稍軽し。俗に鰶魚の児、或ハ鰣魚の

兒といふハ非なり故に李州海部郡出島浦にて鰶魚兒をコハダと呼び、これを本コハダと呼びて別て閩書南産志 巻下 に江鰶魚三四月有之味美但小而多刺淡鹹之間。江溪之滙泉人謂之刺芒といふ是なり 直云。武井擽涯の魚鑑 巻下 に初年をコハダ二年をコノシロといふとあるハ誤なり全く一類二種なり○難字記 巻三 に 鰶の字をツナシと訓ぞ。此字考ふべうらぶ ○江鰶魚の一種西國にてママカリと呼ぶもあはゆるに形も能似て小く扁して鱗數密につけり備前より糟漬となして京師に來れり

直云。本邦昔より鯯の字をコノシロと訓ぜり日本書紀 巻二十五 の 孝徳帝紀に鹽屋鯯魚といふ人あり。注に鯯此云挙能之盧と記せり。又和名類聚鈔 巻十九 鯯の下に四聲字苑を引きて鰶魚名似鯽而薄細鱗者也。注に鰶子例反字亦作鯯和名古乃之呂と見え色葉字類抄 巻七 にも鰶コノシロ亦作鯯と見えさて按ずるに鯯又鱭に作て鰶と同字なり康熙字典 亥集中 に云集韻鱭與鰶同類篇鰶或作鱭 清の王錫候が字貫 巻三十九 に云鱭去聲音霽與鰶同 清の阮元が經籍纂詁補遺 巻六十七下 に云晋書音義引文字集

略曰、鯯亦作鰶。又引字林曰、鯯鰶魚出東萊。此等の
説にて鯯鰶同字なること明かなり。書紀を按むに頃
は遣唐使ありしまゝは唐山の事を見聞して、コノシロは
鯯の字を用ひしなるべし。然るに近來の説に、鯯を
コノシロにあつれば、鱭魚と同物なりといふは、返り
黄魚即鱭魚
て非なり。これは雨航雑録 巻下 に鱑魚一名鮡、又名鯯
魚。文字集略に鯯又作鰶、字音祭。又音制。といひ、正字通
亥集中 に鰶鱭字之譌といふ。此二書の誤を襲ひしも
のなり。本草啓蒙 巻四十 にも鱭魚の一名に鯯魚を載

は、刪るべし。鱭鯯の二音相似たれど、鱭は上聲、鯯は
去聲なれば混ずべからず。又新撰字鏡 魚部 塵添壒囊鈔
巻三 下學集 巻上 天台六十巻音義 巻三 等に、さ渡くの字を
コノシロに用ひしことなり。詳に予が著せし重訂増
補本草啓蒙 巻百十八 に辨ぜれば、茲に略せり。

猴

猴の字、又猿 俗 猨 同 に作る。世に手ナガザルなるエン
コウ 猴と猨との二物を併せ誤りて一物の名に呼べる
なり。本邦古書類に、猿を佐流と訓ずるも亦
誤りといふべし。和産なし。文化六己巳の夏六月、荷蘭の商

八紘譯史云亞毘心域地方極大人黒如漆惟齒目甚白

舶載て寄愚て來る者も同年の冬十一月浪速より本
府に轉致して一至山庚申堂が境内にて觀物に備ふ
利未亞洲の東北亞毘心域國の産なりといふ形状常
の猴なり大にして全身及び頭面唇舌に至るまで皆
黒し其毛は長く柔に兩臂至りて長くして身に倍し
性慧にして馴やすし養ふに菓實の類を喰しめて腹
瀉し毎に寒具の類をもて畜ふといふ唐山にては猨に
品類多しと見ゆ按ずるに桂海虞衡志獸志に猨有三種
金絲者黄玉面者黒純黒者面亦黒といひ嶺南雜記下巻

烏猿

に烏猿出羅定州石城潭身如墨止眼碧歯白即舌赤
黒也短身長臂々倍于身行走如人性甚警慧余携歸畜
之甚馴といへる物是なるべし又埤雅巻四に猿臂通肩
といふ今此猿をもて試るに然らず惟両臂長きのミ
なり本草綱目巻五十一下時珍の説に或言其通臂者誤矣
といへり又明の王濟が日詢手鏡紀録彙編巻百六十三收之にも
辨ありて考ふべし

直云尊郷贅筆巻上に蜀中産烏猿性最黠能解人意楚
師進於上林其使者歸猿長號而絶宋宗卿徴輿作詩
弔之曰瀟湘寒月九疑風盡日哀吟雲水中借渇上林
無限樹却教歸夢入巴東とも見えたり又元の祝穆
が方輿勝覧巻三十七新州土産に桂山有黒猿といひ清
の王漁洋が居易録巻十に李戸部説蜀有黒猿通體黝
黒可愛常于樹上騰跳足不履地獵者不能獲といへ
るも同物なるべし

丹生村大樟樹

本州在田郡石垣の荘丹生村の丹生明神社の境内に
樟の大樹五株ありて各周圍二丈餘にして五株皆切株

より生ぜし萠蘖なり。其本幹切株となりて朽損ある處なれども盤礴して五株の間に連亘せり。今其舊幹の大さを計るに、徑り四丈三尺餘、周圍十三丈許なり。故老の傳に、むかし鹿苑院義滿公金閣寺創立の時、此樟樹を伐り用ふといふ

直云、紀伊續風土記巻五十八在田郡第三に、相傳ふ、足利將軍義滿公金閣寺を創建せし時、此樟を伐りて天井板に用ひらる。今現に金閣寺にある是なり。故老傳へいふ、此樹を伐倒せし時、在田川を亘りて前岸を覆ひしといふ。往古大樹なりしとて諸國に往々地名などに遺りたるもあれど、其樹の現に遺りたるは扶桑木の類、地中より掘出せし物の外、絶えて聞ざりし。今此樟は本幹を四百餘年の前に伐られしかども、舊幹より蘖を生じて、今現に大樹となりて、舊幹の切株と共に遺りあるは、海内其比なかるべし。しかも覺へば往古の物の今に存せるは誠に奇物といふべし」と見えたり

山椒魚 本草綱目巻四十四に載せたる鯢魚の俗称と名を同うす。此魚の事を本草啓蒙

卷四十ニ詳なり

又山生魚とも書けり諸州に産す殊に相摸箱根山に多く産して名物とせるをもて世に箱根の山椒魚といふ又赤腹（アカハラ）同名なり又センクワニ魚越後高田ともいふ夏月湖水又溪澗中に居り冬月は陸に上り石間或は落葉下に竄る形状龍盤魚（井モリ）に似て大さ三四寸土佐にて六七寸のものありと頭圓く蝦蟇の如く全身泥鰌（ドヂヤウ）に似たり四足皆三爪腹微に赤色脊は黒褐色なり而して雄は腹痩雌は腹肥ゆ箱根にて乾腊にして四方へ出す小児の疳虫を治すと物理小識巻十一に游子六曰聞高山源有黒魚如指大其鱗即皮四足可調粥治小児疳といふ即是なり黒魚同名多し

直云江戸の人弄花が管根七湯栞巻十に山椒魚に二種あり箱根にてとれるを地魚（ヂウヲ）といふて大く功もまたましく又大山邊より出るを旅魚（タビウヲ）といふてかたち小さくして功もうすし價も高下ありといへり○又云或説に此魚を明の龔居中が外科百効全書の山鰍なりといふ本書を閲するに巻一に諸瘡合口散に山鰍

黄泥包煨熟後去泥為末麻油調搽とありて形状を載せざれども的當とも知しがたし

日本政府圖書

桃洞遺筆巻之四終

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan